

政治学におけるエスノメソドロジーの寄与

西 山 真 司

目次

1. エスノメソドロジーとは何か
 - (1) エスノメソドロジー研究の例
 - (2) 社会秩序の認識論として
 - (3) 「あたりまえ」を経験的に発見する
 - (4) エスノメソドロジーの方針
2. 政治学との接点
 - (1) エスノメソドロジーは「政治」をあきらかにできるのか
 - (2) 既存の研究テーマに対する優位性
3. 政治学におけるエスノメソドロジーの展望
 - (1) 第一線公務員論
 - (2) シリアのエスノグラフィー研究
4. 本稿のまとめと含意

人間の社会生活におけるあらゆる側面がそうであるように、政治現象も人びとの日常的な経験の水準から切り離されては存在しない。政治というものが発現するどのような場面も、まずはその実践に関与する当人たちにとっての第一義的な問題関心のもとに進行する以上、政治学は人びとが実際に生きている政治の世界を無視することはできないはずである。しかしながら、人びとが日常的に生きる政治の世界を経験的に記述・分析することは、政治学にとってつねに困難な課題であった。とりわけ、実証主義的な前提を維持したまま、そのような課題を克服することは難しい。

では、人びとの日常的な実践の記述から、経験的な政治学分析をおこなっていくことはできるのだろうか。本稿では、エスノメソドロジーという研究方針がこの問いに対してもつ可能性を検討してみたい。これまで、エスノメソドロジーが政治学において果たす寄与については、ほとんど検討さ

れてこなかった。その理由として考えられるのは、エスノメソドロロジー自体が政治学者にあまり知られておらず¹⁾、また知られている場合でも、政治学に直接関係しないミクロ社会学の一種としてであったからであろう。本稿では、まずエスノメソドロロジーとは何かについて概説したうえで、経験的な政治学との接点を示していく。そのうえで、エスノメソドロロジーの方針が政治分析にどのように役に立つかということ、具体例に即して論じていきたい。その際に取り上げるのは、人びとの日常的な実践の記述が、政治権力の作動様式についての構造分析になっている事例である。最後に、本稿の含意について、実証的な政治科学と対比しながら述べることにする。

1. エスノメソドロロジーとは何か

エスノメソドロロジーは、1960年代に社会学者のH・ガーフィンケルによって創始された研究分野であり、当初はかなり周縁的な存在であったものの、現在では社会学において一定の地歩を占めるようになってきている。その基本となる発想は、人びと (ethno-) が日常生活を秩序だった仕方で遂行する方法論 (methodology) を記述する、というものである。ここで、「エスノメソドロロジー」における「メソドロロジー」は、研究者が分析にもちいる方法論のことでなく、記述の対象となる日常的な実践の遂行者のもちいる方法論であることに注意が必要である²⁾。その意味で、エスノメソドロロジーはたとえば質的・量的分析における方法論に類するものというよりも、むしろ記述の対象である社会的世界をどのようなものとして捉えるかという視角に関係しており、言うなれば一種の科学的な世界観である。その世界観は、一方で実証科学への批判であると同時に、他方では経験的な研究であるこ

-
- 1) 最近では、山田 (2016: 第5章) が政治学とエスノメソドロロジーの関係について比較的詳しく紹介しているが、しかしこれは稀な例であろう。また、これは政治学に限った話ではないが、エスノメソドロロジーの普及があまり進まないことの、本質ではないにせよ見落とせない原因として、ガーフィンケルの書く文章のわかりにくさが挙げられるだろう。長く、そして解釈の難しい英文で書かれた彼の業績は、ネイティブ・スピーカーにすら解説が困難であるようである (cf. Lynch 1999: 215)。
 - 2) ただしもちろん、科学者が科学的活動を遂行すること自体も日常的な実践の範疇に含まれるわけだから、科学者がもちいている方法論が、どのようにして方法論としての地位を達成しているかということも、エスノメソドロロジーの研究対象となる。この点については、Lynch (1993=2012) が詳しい。

とへの強い志向性を伴っている。現在の政治学においては、経験的な研究であることと実証主義的であることが同義のものとして語られることが多いため、エスノメソドロロジーのこうしたスタンスは、奇異なものに映るかもしれない。ここでは、エスノメソドロロジーがなぜそのような立場を取っているのかということ、具体例や学説史的な展開を交えながら示していきたい。

(1) エスノメソドロロジー研究の例

「エスノメソドロロジーとは、人々が実際の活動を秩序だった形で遂行するために用いている方法を解明する研究分野である」（申田・好井 2010: 1）と言われる。つまり、簡単に言ってしまうと、エスノメソドロロジー研究は、人びとが日常的になにげなくおこなっていることを、それ自体として偉大な秩序達成プロセスとして捉え、どのようにしてそれが成し遂げられているのかを記述する、ということである³⁾。ここでの「秩序達成」とは、それをおこなっている当事者たちにとってその場が理解可能で困惑せずに対処可能なかたちで生じていることを指している（よって、規範的な望ましさや、平和であることなどは、ここでの「秩序」概念とはさしあたり関係しない）。その意味では、エスノメソドロロジー研究の対象は、潜在的に、人間の活動のありとあらゆるところにまで及び得ることになる。

エスノメソドロロジー研究の例をひとつ取り上げて見てみよう。われわれが普段なにげなく達成している、もっともトリヴィアルでわかりやすい社会秩序のひとつは、会話である。たとえば、以下は西阪仰の挙げている入門用の素材と分析の例である（西阪 1997: 134-135）。

A： いやいやぼくはね、ほんとびっくりしたことがあるんですよ。

B： （ふーん）〔あるいは約一秒間の沈黙〕

A： あのー〔県名〕に赴任した一年目に……

3) ガーフィンケル自身は、エスノメソドロロジーをつぎのように定義している。「私は『エスノメソドロロジー』という用語で、つぎのようなことを意味している。つまり、エスノメソドロロジーは、日常生活において組織化され円滑に進むさまざまな実践を偶発的・継続的に達成していくものとしてのインデックス表現やその他の実践的行為の合理的な特性を研究する、ということである」（Garfinkel 1967: 11）。

AとBのふたりが会話している、取り立ててどうこう言う必要のないような、ありきたりな状況である。エスノメソドロジー研究の一種である会話分析は、このBの「ふーん」という発言（ないし、ここでなにも言わなかったこと）に注目する。最初の発言において、Aはこれから物語を開始することを提案しているのに対して、Bの「ふーん」や沈黙は、Aからの提案を拒否せず、そのままAが物語を始めることを促している（実際にAは、つぎのターンにおいて「あー」と言って物語を始めている）。最初のAの発言は、これからAが物語を始めることに対して拒否する場所をBにあたえているのだが、Bはそれを拒否せず、発言権をそのままAに受け渡していることが見て取れるということである。そしてまた、Aの最初の発言は、Aの物語がどのように聞かれるべきかについての指示もあたえている。これからの物語は、「びっくり」するようなものとして聞かれるべきであり、またAによってそのような「びっくり」したことが示されたとき、物語は終了するだろうという指示である。

このような分析は、多くの社会学者にとって「言われてみればたしかにその通りかもしれないが、だからどうしたと言うのか」という反応を引き起こすかもしれない。実際にかつてL・コーザーは、エスノメソドロジー研究に対して、それが五歳児に言って聞かせるようなことをくどくどと述べており、トリヴィアルなことに最大限の洗練を加えた知見の寄せ集めとしての「フランケンシュタインの怪物」をつくっているに過ぎないと批判を加えた（Cosser 1975: 692）⁴⁾。しかし、われわれの日常生活というものは、会話のようななにげない相互行為秩序の場面を幾重にも積み重ねることで、リアリティとしての地位を獲得している。日常生活が日常の一場面であるからには、それはリアルな社会秩序を形成しているのであり⁵⁾、たとえば会話分析は会話という秩序がそこに参加しているメンバーたちによってどのように組織化されているかを記述・分析しているのである。

さらにもう一点、つけ加えておくべきことがある。エスノメソドロジーは、社会現象をミクロな視点で分解していくことを目的とした研究ではな

4) 全く同様の評価が Habermas (1981: Bd.2, 223=1987: 下巻 57) や Giddens (1977: 176=1986: 120) にもある。

5) 実際にこれが「秩序」と呼び得るのは、そこからの逸脱が生じないからではなくて、まさに逸脱がなされた場合、われわれがなんらかの修復を試みるからである。この点については、ガーフィンケルがおこなった違背実験に即して後述する。

いということだ。たしかに日常会話のような相互行為場面を研究対象とすることで、エスノメソドロロジーは人びとがおこなっている実践に注意を払うのだが、それは社会秩序のマクロな構造的側面と対比されるミクロな相互行為を重視するからというのではない。たとえば会話が秩序立って成立するためには、会話実践のメンバーたちは「誰がどのような場合にどのようなきっかけで話し始めることができるか」などの多くの規則に従っている⁶⁾。一度に多くの人々が同時にしゃべりだしてしまっても会話は成り立たないし、仮にそのようなことが起きてしまった場合には、会話の順番取得という規則を再確認するためのなんらかの修復がなされるはずである（ちょっとした笑いの後に、相手に「あ、どうぞ」と発話を促すことなど）。このような視点から見れば、秩序はランダムな振る舞いが偶然的にかみ合うことで成り立っているものではない以上、メンバーによって規則に従った行為がなされることを促すような構造が存在しているはずである。エスノメソドロロジーは、そのような構造を、まさに人びとの規則に従った行為それ自体のなかに発見しようとするものなのである。よって、エスノメソドロロジーはミクロ社会学の一種ではないし、もうすこし正確に言えば、構造と行為や、ミクロとマクロを二項対立化するような慣例的な社会科学とはちがった切り口で社会的世界を見ていると言ってもいいだろう。

(2) 社会秩序の認識論として

エスノメソドロロジーは、以上のように、日常的な実践としてこそ、社会的リアリティ——人びとの生きる自明な世界——が秩序立てて構成されているのだという視角をもっている。その意味で、人びとの実践（科学的な実践も含まれる）に先立って客観的な現実が存在するとは考えない。しかしながら、それと同時にエスノメソドロロジーは、リアリティが構成される作用自体はあくまでも経験的に発見され得る事柄であるとする⁷⁾。つまり、エスノメソドロロジーは、実証主義的な認識論とは対立しつつ、経験の対象

6) 会話がどのように構造化されているかについて、会話分析では一定の指針を標準化している（cf. サックス・シェグロフ・ジェファソン 2010）。

7) ガーフィンケル自身、「エスノメソドロロジーとは、結局のところ、それも必然的に、どうしようもなく経験的な事業なのである」（Garfinkel 1996: 5, acknowledgements）と述べている。

に即した研究を志向するわけである。ここで多くの科学観とはくいちがう。

このことの理由を理解するためには、まだ「エスノメソドロジー」という名称が生まれる以前の、ガーフィンケルの知的な探求にさかのぼってみるのがいいだろう。ガーフィンケルは20世紀におけるアメリカ社会学の巨魁T・パーソンズを主査にして、『他者の知覚』(Garfinkel 1952)という長大な博士論文(未公刊)をハーヴァード大学に提出している⁸⁾。この論文の目的についてガーフィンケルは、パーソンズの主意主義的行為の理論をA・シュッツ流の現象学に則って書き換えつつ、さらにそのシュッツを意図的に改変していく試みであると説明した(Garfinkel 1952: 162-163)。それが意味するのは、パーソンズ的な行為理論の認識論前提を取り替え、シュッツ的な現象学を具体的な場面の経験的な観察へとつなげるということである。

パーソンズ行為理論の認識論的前提である「分析的リアリズム」(Parsons 1937: vol.2, 730=1989: 第五分冊 138)は、科学的な訓練を受けた観察者であることを、当該の行為の状況の事実を知るための必要条件としている。だから、パーソンズによれば、行為者自身による行為の状況の記述は、科学的な観察者からすれば不正確なものではない。たしかに社会秩序はリアルなものとして存在しているが、それは分析的にしかあきらかにならないというわけである。パーソンズの行為理論は、まさにこのリアルな社会秩序が可能になるための分析的な前提条件を整理することであった(有名な「共有価値」説はここから導出されている)。これに対して、シュッツの現象学は、リアルな社会秩序自体が、そのような秩序を認識する作用に依存して存在していると考える。このことを、ガーフィンケルは、つぎのように表現した。

「この見方においては、ある理論がこんなふうやあんなふうに切り分ける具体的な対象からなる世界が存在しているのではなくて、ケーキは切り分けるといふまさにその行為のなかで構成されるのだということになる。切るという行為がなければ、ケーキは存在しないのであり、近似すべきリアリティというものも存在しなくなる。なぜなら、この見方における世界

8) 『他者の知覚』とその背景については、他にも Heritage (1984) をはじめとして、浜 (1992)、Koschmann (2012) などに簡単な解説がある。

とは、まさにそのように現われているものでしかないからだ。現象学者たちが会話のなかでしばしば使う表現を借りれば、こうなるだろう。『その背後にはなにも隠されていない』、と」（Garfinkel 1952: 95-96）。

この見方に従えば、シュッツ（およびガーフィンケル）にとっての秩序問題は、パーソンズにとっての秩序問題の手前の段階を論じていることになる。人びとが社会的世界を生きる際の日常的な態度に備わる独自の性質をまじめに受け取れば、社会秩序の問題として真っ先に考えられるべきは、対象の状況に内在する人びとの認知の一致がいかんにして果たされているのか、ということになるからである。社会秩序の根本的な問題は、パーソンズが考えたように人びとの動機が一致・調和するための外在的条件を探求することではなく、ある状況（そこにはホブズ的な自然状態が含まれていい）が、なぜ同じ世界として、行為者のあいだで認識されているかというところにある。こうした根源的な問いが発せられるためには、近代科学を特徴づけてきた実証主義的な認識論から脱却せねばならない。なぜなら、実証主義的な認識論の場合、それを前提にどのような社会秩序をイメージするにせよ、われわれがさしあたり同じ世界を生きていることが自明の前提とされてしまうからである。

(3) 「あたりまえ」を経験的に発見する

以上のようなガーフィンケルの主張をおおざっぱにまとめてしまえば、社会秩序に対する認識論的な態度を実証主義から構成主義へと転換しようとするものだと言うこともできるだろう。ただしこのことは、もっぱら哲学的な議論としてのみなされているわけではない。ガーフィンケルの主張のもう一方の核心は、日常的に人びとが生きている社会的リアリティが、具体的な経験的文脈において発見されねばならないということであった。秩序はあくまでもローカルに、その場その場の文脈において達成されるもの以外ではあり得ないため、社会秩序の研究も具体的な実践に即してなされなければならない⁹⁾。このことを、エスノメソドロロジー以前において果

9) ここでの「ローカル」という言葉の意味については、後段でふたたび説明する。さしあたり、M・リンチによるつぎの説明も参照のこと。「エスノメソドロロジー

たしていたのが、違背実験という経験的研究のあり方だった。

エスノメソドロロジーが注目する秩序は、人びとが日常生活を「誰にとっても同じ世界」として生きることができているということのなかにある。言い方を変えれば、人びとにとっての「あたりまえ」こそ、それがあたりまえであるがゆえに研究の対象となるべきものなのである (cf. Garfinkel 1991: 11)。ガーフィンケルは当初、こうした「あたりまえ」を経験的に発見するために、通常の社会生活をわざと攪乱してみる、という実験をいくつかおこなった。攪乱に対して人びとが示す反応こそが、翻って社会生活における「あたりまえ」をあきらかにしてくれるだろうというのがそのねらいである。

このねらいをもうすこし理論的に定式化しておく、と、ガーフィンケルは「あたりまえ」の場面が、間主観的に規則が妥当することに対する期待への期待 (= 「構成的期待」) によって支えられていると考えた (Garfinkel 1963: 209)。ただし、そのような構成的期待は、パーソンズの共有価値のように、行為の実際の状況を超越するかたちで存在するものではない。構成的期待は、当該の相互行為場面において妥当していると想定された規則への違背が生じた場合であっても、「何らかの規則は妥当している」という状態を回復しようとする実践そのもののうちにある。つまり、当の実践を具体的な文脈において見てやることなしに、社会秩序の可能性を云々することはできない。実際にガーフィンケルがおこなった違背実験を簡潔に見てみよう¹⁰⁾。

違背実験のひとつは、意図的につくり出されたゲーム状況におけるもの

においてローカルなという形容詞は、主観性、視点、特定の利害関心、限定された場所での小さな行為といったものとはほとんど関係ない。そうではなくそれは、慣れ親しまれた社会的客体が構成される活動の不均質な文法に言及しているのである。均質な領域 (たとえば汎言語的性質、認知構造、ドクサ、歴史的言説) を理論的に公準とすることによって不均質性を克服しようとするのではなく、エスノメソドロジストは何かしら単一の秩序だった配置が一連の決定的な組織化の法則や歴史的段階、規範、意味のパラダイム的な秩序を反映ないし例証していると仮定することなく、『さまざまに秩序だっていること (orderlinesses)』のパッチワークを研究しようと試みている。エスノメソドロジストは、社会的行為や相互行為が起きている歴史的・社会的『文脈』を否定しない。むしろ、彼らが主張しているのは、そうした文脈の特定化が有意性のローカルな組織性に常に結び付けられているということである」(Lynch 1993: 125=2012: 148, 傍点は原文でイタリック)。

10) 以下の違背実験について、ガーフィンケルは同じ分析を複数の論文において重複しながら掲載している。よってここでは煩雑になることを避けるために、Garfinkel (1952) (1963) (1964) の概要をまとめるにとどめておく。

である。この実験においては、被験者に三目並べ（○×ゲーム）をおこなってもらい、もし対戦相手が自分の描いた「○」を消してそのうえから「×」を描くという行動に出た場合、被験者がどのような反応をするかを観察する。一部の被験者は困惑し、怒り、ゲームを放棄するが、別の被験者はあらたなゲームが開始されたと考え、そのままゲームを続ける（自分も相手の描いた「×」を消してそのうえに「○」を描いたりする）。後者の場合、実験が開始された当初のゲームの規則は失効したと言えるが、なんらかの規則が存在していて、それが間主観的に妥当していることへの期待への期待（構成的期待）は存続しているということになる。この実験によってあきらかになったのは、安定した共同行為のために具体的な規則の内容への事前の合意は必要ではなく、構成的期待を確認し合う作動がゲーム内に生じることでゲームの秩序が維持されるということである。

もうひとつの違背実験は、日常的な状況においてなされている。ガーフィンケルは、医学校への進学希望者に、以前に行われたという医学校面接試験のニセの録音データを聴かせている。ここで進学希望者たちは、あきらかに面接に不適切な受け答えをしているはずの受験者が、面接官にとっては好印象であったという情報をあとからあたえられる。すると、進学希望者たちは、当初の自分の評価（「あの受験者は面接官に対して横柄である」）を修正して、ニセ面接の受験者に肯定的な評価を下そうとするようになること（たとえば「あの受験者は自信に満ちていた」）が観察されている。ニセ面接実験では、ゲームの規則についての自分の当初の期待が裏切られた場合であっても、人びとはそこになんらかの規則があるはずだというより基底的な期待を持続させることが示されたとされている。

こうした違背実験は、「あたりまえ」の日常を支える構成的期待がどのようなかたちで維持されているかについて、具体的な文脈において経験的に示したものである。実証主義者たちは、“客観的”で“真の”秩序のあり方を同定できるのは状況の外部にある科学者のみであると考え、当の実践に関与する人びとの状況の理解は“不正確”で“あいまい”なもののみとなしてきた。違背実験によってガーフィンケルは、そもそも秩序のあり方は実践に関与する人びとの理解に相関的なものとしてのみ存在し、なおかつそのような理解のあり方は経験的に観察し得るものであることを示そうとしたのである。

(4) エスノメソドロジーの方針

しかしながら、違背実験というのはまだエスノメソドロジーの萌芽的な段階であって、それこそ実験的な性格が強いものであった。その後、エスノメソドロジーが分野として確立していくにあたって、研究プログラムとしての一般的な方針を確認することができるようになった。ただし、エスノメソドロジー自体には、パーソンズ理論のような記述・分析のための特別な一般理論や概念枠組みが存在しているわけではない。よってエスノメソドロジーの方針とは、記述・分析の際に社会現象のどのような特性に注目するかということに関係している。ここではそのうち、「再帰性 (reflexivity)」「説明可能性 (accountability)」「ローカリティ (locality)」という相互に交差する三つの概念についてそれぞれ整理していくことにしたい。

まず、「再帰性」についてである。再帰性とは、日常生活のさまざまな場で行為する人びとの実践と社会構造とが、再帰的ないし相互反映的に条件付けあっているという事態を指している。たとえば先の会話の例において、Aの提案を受けてBが物語の開始を促すようなメッセージを発しているにもかかわらず、Aが何度もBに質問を繰り返したりすれば、おそらくBはいつまでたっても物語が始まらないことに当惑するだろうし、その当惑を実際に示すだろう。なぜなら、Aの振る舞いは、物語をするという会話の規範に違反した不適切なものだからである。しかしながら、なぜそれが不適切な行為であるかということは、当の場面が物語をするという規範に支配されたものであることからしか説明できない。よって、「物語をする」場面であることの説明と、あるふるまいがこの場面にとっての違反行為であることの説明は、再帰的に依存しあったものである。その意味で、人びとの社会的なやりとりがなんらかの秩序をもった“場面”であることには、その場面においてもちいられる説明以外に、根拠をもたない。人びとが日常的になにげなくおこなっていることは、その場面に即して合理的なものであるし、それが合理的であるのは、その場を支配する規範構造に合致したものだからである。こうして、エスノメソドロジーにとっての再帰性とは、高度な認識の様式を意味するものではなく、「あたりまえ」

の社会秩序を組織化するありふれた原理なのである¹¹⁾。

つぎに、「説明可能性」とは、日常的なさまざまな場面にいるメンバーが、その場面にあった実践をおこなうことができるということに関係している。ガーフィンケルとH・サックスは、自然言語に含まれる「インデックス性」というものを題材に、このことを示している（Garfinkel and Sacks 1970）。インデックス性とは、会話などに不可避的に登場する文脈依存的な言葉である。たとえば、「あの」「この」「いま」「わたし」などの言葉は、その表現が指している内容について、一律かつ客観的に規定することができない¹²⁾。通常社会科学においては、このように文脈に依存して決定されるような言葉は矯正の対象であり、それは科学的で正確な言葉に置き換えられなければならないと考えられてきた。しかしながら、「あの」「この」「いま」「わたし」といったインデックス表現が指すものを、いつ・どこで・だれにとってもあきらかなように定義することはできないにもかかわらず、現実の会話の当事者たちにとっては、それらの意味内容は難なく諒解されている。言い換えれば、会話は、「そこで本当はなにが言われているか」ということを文脈に依存しないかたちで書き換えることができないものであっても、理解可能で説明可能ものとして進行するのである。そして、会話のような一見トリヴィアルな社会秩序が、このインデックス性を含みながら説明可能なものとしてその場その場で達成される事態を、エスノメソドロロジーは研究する¹³⁾。ここでエスノメソドロロジーが特殊に関心をもっているのは、ある秩序をつくっているメンバーの実践が、その秩序の状況を説明可能なものにしてしている手続きと同一であるということである。

そして、「ローカリティ」についてである。エスノメソドロロジー研究が

11) この点に関しては、Lynch (2000) を参照のこと。ただし、M・ボルナーは、エスノメソドロロジーが研究の対象とする社会秩序のメンバーだけではなく、そのような研究をおこなう分析者自身が説明可能な場を構成しているのだという「ラディカル再帰性 (radical reflexivity)」が、エスノメソドロロジーの視野から欠落しつつあることに警鐘を鳴らしている (Pollner 1991)。

12) 言語のインデックス性についての初期の研究であり、ガーフィンケルのエスノメソドロロジーにも多くの影響を与えたものとして、Bar-Hillel (1954) を参照せよ。

13) さらに言うておけば、このようなインデックス性は、なにも日常会話だけに見られる“あいまいさ”なのではない。客観的であることを標榜する科学的な営みも、実はそれ自体インデックス的表現と常識的な推論によって実践されている (Lynch 2001=2000)。このことから、エスノメソドロロジーは科学社会学の分野において特に注目されている。

実践のローカリティに注目するという点については、すでに述べておいた。くり返せば、社会現象は本来、マイクロやマクロといったような空間的なメタファーによって切り分けられるものではなく、“マクロな”事象とされているものでさえ、その場その場でローカルに達成されている事柄なのだというのが、エスノメソドロジストの主張する社会秩序一般の特性である。エスノメソドロジーが関心をもつのは、通常社会学がマイクロ構造やマクロ構造（およびそれらの相互連関）ということによって表現しようとしているものが、いかにして具体的かつ経験的な社会的実践のなかで生み出されているか、ということである（Hilbert 1990）。よって、たとえばマクロで構造的なものとして認知されているような政治権力の作用といった事柄も、ローカルな場面においてはじめてリアルであり得る。この点は、具体例を出しながら後述することにした。

エスノメソドロジーの方針は、社会秩序の「再帰性」「説明可能性」「ローカリティ」という特性に注目することによって、通常社会学がありふれていて退屈なものを見做すことで素通りしてきた「あたりまえ」を、そうであるがゆえに記述・分析していくことだとまとめることができるだろう。

2. 政治学との接点

以上で示してきたエスノメソドロジーの特徴は、しかしながら、多くの政治学者にとっては政治学に無関係のものに思われるかもしれない。会話のような人びとが日常的にならざるおこなっていることを合理的な社会秩序として記述・分析することは、すくなくとも政治学にとっての問題関心ではないからだ。このため、社会学はともかくとして、その隣接領域である政治学においてエスノメソドロジーは受け入れられてこなかった。だが、どれほど“非日常的”で“非人称的”に見える政治現象であっても、それが人びとの日常的な実践のなかにおいて構成されていることに変わりはない。そこで、エスノメソドロジーが政治学においても意義をもつ可能性が出てくる。以下では、政治学においてエスノメソドロジーを取り入れようとする際に、当然出てくるであろう疑問に応答していくことにしたい。

(1) エスノメソドロロジーは「政治」をあきらかにできるのか

政治学におけるエスノメソドロロジーの可能性を考える場合に、もっとも問題となるであろうことは、エスノメソドロロジーの記述や分析によってあきらかになるのが、相互行為という社会秩序のあり方それ自体でしかないのではないか、ということである。先ほど挙げた「再帰性」「説明可能性」「ローカリティ」のいずれも、社会秩序の構成をどのように見るかという視角には関係しているが、そのこと自体は政治学的な知見とはならない。

しかし、エスノメソドロロジーは会話などの相互行為に代表される、もっとも原理的な秩序だけに関心をもつのではない。すでに述べたように、エスノメソドロロジーは、あらゆる社会秩序が具体的な文脈に依存して、言い換えれば、メンバーの実践とその場において適切な規範との相互参照構造のもとで、構成されていると考える。つまりたとえば、ローカルな実践のなかで政治という出来事が説明可能（accountable）なかたちであらわれてくるということも、人びとがその場で用いる常識や推論（ethnomethodology）と政治構造との再帰的な関係のなかにおいて、経験的に記述・説明できるということである。この点に注目するならば、エスノメソドロロジー研究は相互行為という秩序のみならず、ある場面に置かれた人びとがどのような政治の世界を生きているかについてもあきらかにできるだろう。人びとの日常的な実践のなかに政治のリアリティが存在するのであるし、逆に言えば、このリアリティの外部に認識可能な「政治」など、そもそも存在しない。

ここで既存のエスノメソドロロジー研究のなかから、具体例を見てみよう。ただし、エスノメソドロロジー研究として政治現象を正面からあつかった研究はほとんど存在しないため¹⁴⁾、代わりに法廷における裁判官と被告とのやり取りにおいて、ある出来事が法的な推論によっていかに「法規への違反」として構成されるかを例としてみたい。ここでの題材になっているのは法現象であるが、エスノメソドロロジーによって相互行為秩序それ自体だ

14) 先ほども挙げた山田（2016）は、日本の主婦の政治参加を参与観察的に記述した LeBlanc（1999=2012）を、政治学におけるエスノメソドロロジー研究のひとつとして紹介している。ただし、R・ルブランがこだわった参与観察というのは、かならずしもエスノメソドロロジー研究の唯一の手法ではないことには注意しておきたい。

けではなく、ある種のリアリティが構成される仕方も記述できるということが示されるはずである。

ポルナーは、『通俗的な推論』（Pollner 1987）において、交通法規への違反に問われた被告と裁判官の以下のようなやり取りを記録している¹⁵⁾。

裁判官：あなたは、21 - 4 - 61 地区の交通、えー、交通標識を無視したとされています。

被 告：あの、そのしゅ…主張は無効ではないかと思うのですが。

裁判官：えーと、有効か無効かの話をしているわけではありません。つまりあなたはこの件に関して無罪であると抗弁したいということですよ？それでいいですか？

被 告：いえ、有罪であることは認めますが、どの方向からも車は来ていませんでしたし、私は注意していました。

〔中略 ※この間被告が現場の状況をボードに描いて示すやりとり〕

裁判官：ですがもちろん、車が来ていたかどうかは大事な要因ではありません。

被 告：あー

裁判官：法律では、しん…信号を無視してはいけないことになっています。そうですね？

被 告：そこに、ちょうど市立…市立大学があります。

裁判官：ええ

被 告：あの、授業期間は、みんな大学に来ますし、みんなここを渡るんです。横断歩道のところではありません。毎日何百人も。横断歩道の信号機など、その、全然見ていないんです。

裁判官：ああそう

被 告：で私は、私は横断歩道の信号機のところで、ちゃんと右左を見ましたし、すごく注意してそうしました。

15) 以下のやり取りは Pollner (1987: 102-103) からのもの（さらに詳細なヴァージョンは Pollner (1978: 277-278) に掲載されている）。ただし、もともとが英語の口語を筆記したものであるため、訳出に際して表現を簡略化したところもある。

裁判官：ご存じでしょうけど、あの一その、見ているつもりでもちゃんと見えてなくて、毎年多くの方が亡くなっています。みなさん、あなたほど目が良くないのですかね？その日の何時頃でしたか？

被告：えっと、それは、その、もう夜でしたし、信号もとてもよく見えました。

裁判官：わかりました。

このやりとりにおいて、被告は行為の実際の危険性（車が来ていなかったこと、ちゃんと気をつけていたこと、多くの人がいつも同じようなことをしていることなど）を、信号無視という事実にとって有意な要件として挙げている。よって、抗弁の機会をあたえられた際に、被告は有罪であることを認めつつも、自分の行為には危険性がなかったことを述べようとするのである。それに対して裁判官は、被告によってどのような行為が実際になされたかということを決定するために、法の構成要件となるような事情を考慮している。ポルナーは、こうした両者の実践によって、法的なリアリティが形成されていくということに注目している（Pollner 1987: 104）。被告の行為には（被告自身が述べるように）原理的にはさまざまな意味を付与し得るのかもしれない。だが、法廷において問題となるのは、「危険かそうでないか」や「みんながやっていることかどうか」といった慣習的・道徳的な判断ではなく、「有罪か無罪か」「信号を無視したのか否か」「故意か過失か」ということであり、この基準に沿って「実際には何がなされたか」という“客観的な事実”が決定されていく（そして、裁判官もそのような方向に向けて被告とのやり取りをデザインしていこうとする）。つまり、法廷においては、「客観的な事実”に法を正しく適用する」という法的なリアリティを構成するための構造が存在しているのである¹⁶⁾。

このような事例研究は、法廷における相互行為実践の記述をつうじて、法的なリアリティと、そのリアリティを構成する構造をあきらかにしていくことができる。法や政治といったシステムの構造も、その場の実践との再帰的な

16) 以上のような法的実践については、たとえば専門家と素人、常識的推論と法的推論などといった多くのトピックが含まれているが、ここで詳細を検討することはできない。エスノメソドロロジーの立場から法的実践をあつかったものとして、邦語では小宮（2011）が参考になる。

関係のなかで、説明可能なものとなるのである。このような研究方針は、これまでの政治学にはなかった分析上の利点をもたらしてくれるはずである。

(2) 既存の研究テーマに対する優位性

しかしながら、エスノメソドロジーを政治学に導入するというのであれば、既存の政治学におけるどのような知見に対して意義をもつのかということも明確にすべきであろう。ここでは、政治構造をめぐる議論に焦点を合わせてそのことを論じてみたい。

政治構造をめぐる議論は、かつてはさかんであったものの、現在では政治学の中心的なトピックではなくなっている。その理由としては、マルクス主義政治学の低迷や、新制度論の登場などを挙げることもできるだろう。だが、1960年代以降の行動論政治学の失速が、政治構造論が衰退したことのもっとも直接的な要因であることはまちがいない¹⁷⁾。

ところで、ある意味で行動論政治学の集大成になったのは、G・アーモンドとS・ヴァーバによる『市民文化』(Almond and Verba 1963=1974)である。政治文化論の代表作ともされる同著は、パーソンズの構造 - 機能主義システム理論を比較政治学に応用することで、政治システムの構造を明らかにしようとした最初で最後の試みとなった。『市民文化』が画期的であったのは、パーソンズ理論の枠組みを使いながら、政治システムの構造というものを、諸個人が認識するリアリティの水準において捉えようとしたことである。行動論以前の政治学が憲法典などに記載された公的な政治制度を比較することで満足していたのに対して、アーモンドらは、諸個人が実際にはどのような政治の世界を生きているのかという観点から政治構造の特質を考えようとした。そして、諸個人に認識された政治的リアリ

17) というのも、学説史的に見た場合、第二次世界大戦以前から連続と続いていた(旧)制度論の最後の残滓が行動論政治学における政治構造論だったからである。ある国の政治構造を憲法などに規定された公的の制度から類推する旧制度論に対して、その静態性を補うかたちで非公式な制度・過程・要素を含めた広角的な把握を目指す、というのが行動論政治学の素地になっていた(Easton 1993: 292=1996: 370)。よって、行動論政治学の衰退は、研究対象を公的な政治構造から徐々に裾野を広げていくことで生き残りをはかっていた政治構造論にとって、立脚する地盤を失うことを意味していたのである。

ティを、「政治文化」と呼んだのである¹⁸⁾。

アーモンドらの政治文化論のねらい自体は、現在においてもその有意性を失ってはいない。政治構造を経験的に記述・分析しようとする試みにとつても、また、自然科学モデルを模倣してきた政治科学が、現実人びとが生きる政治の世界を見失ってしまっているという規範的な問題認識にとつても、政治文化論的な視角は有効であろう¹⁹⁾。しかしながら、政治文化を導出する際にアーモンドがおこなったのは、ミクロな諸個人の心理を集積してマクロな政治構造を推測するということであり、これに対してはいわゆる生態学的誤謬をはじめとした論理的・理論的な問題が当時からさまざまに指摘されてきた²⁰⁾。だが根本的には、人びとにとっての政治的リアリティを、当のリアリティをつくりだしている実践から切り離してしまうパーソンズ由来の理論上の操作にはじめから無理があったと考えるべきだろう。ここで問題になっている“リアリティ”とは、あくまでもある場面の当事者たちが実際に生きている世界のことであり、科学的な観察者の予断（「分析的リアリズム」）によって切り取られる類のものではないからだ²¹⁾。そしてアーモンドらのやり方に代わるような解決策はその後にも現われることはなく、行動論政治学とともに政治構造論も後景に退いてしまった。

エスノメソドロジーは、かつての政治学がうまくあつかうことのできなかった政治構造論に対して、まったく別の研究アプローチを示唆しているように思われる。すでに述べたように、そもそもエスノメソドロジーはパー

18) 筆者は、1960年代における政治文化論の成立と衰退の理論的背景について、西山(2010-2011)において詳論している。

19) 後者については、G・ストーカーがつぎのように述べている。「政治学が——そして社会科学一般が——うまく理解したり説明したりできないことは、21世紀のはじめにおける市民にとって、政治が何を意味しているか、ということである。われわれには、われわれ市民が政治の実践をどのように理解しているかということを知りたいとする経験的努力が一層求められている」(Stoker 2010: 63)。

20) 当時なされた理論的な批判としては、たとえば、Kim (1964)、Pateman (1971)、Lehman (1972)、Pye (1973) などがある。

21) アーモンドらが、『市民文化』のために大規模なインタビュー調査をおこなっているにもかかわらず、科学的な客観性という観点から人びとが認識しているリアリティを切り捨ててしまったことは、たとえばつぎの引用文からも理解できるだろう。「[イギリス人やメキシコ人に話しかけることで得られた——引用者]そうした証拠はたいいていの場合、直接的なものではあるけれど、なにげない会話や不適切なサンプルにもとづいていたりして、体系的ではない。——[中略]——われわれが集めようとしたのは、政治的態度に関する直接的であると同時により正確なデータである」(Almond and Verba 1963: 51=1974: 47-48, 傍点は引用者)。

ソンス理論との対抗関係で生まれてきたものであり (Garfinkel 1991)、その意味でもアーモンドらの政治文化論にとってのオルタナティブになる可能性がある。政治のリアリティは諸個人の心のなかにあるイメージなのではなく、人びとの実践のなかで、またそのような実践として、構成されるものであり、政治構造もミクロな実践と対比されるマクロな実体ではなく、その場の実践において適切な規範が参照される過程に存在している。エスノメソドロジーの基本的な方針である「人びとが日常的におこなっている実践を経験的に記述すること」は、それ自体としてはシンプルであるが、理論的にも経験的にも、あらたな政治構造論の展望をあたえてくれる。

3. 政治学におけるエスノメソドロジーの展望

以上で述べたあらたな政治構造論としての展望について、ここで具体的な研究を紹介しながら示していきたい。取り上げたいのは、第一線公務員についての議論と、シリアのエスノグラフィー研究である。これらはいずれも、エスノメソドロジー研究としておこなわれたわけではないが、政治権力の作動構造というテーマに示唆をあたえるものとして読むことができる。

(1) 第一線公務員論

M・リップスキーの『ストリート・レベルの官僚制』(Lipsky 1980=1986)は、第一線公務員論の代表的な業績として、行政学を中心に広く知られている。第一線公務員論は、行政サービスの対象者と直接的な相互作用関係にある公務員が、複雑な環境のなかでどのような裁量をもっているかということの問題関心とする。しかし、第一線公務員と市民との相互行為の場面に着目することによって、リップスキーは公共政策が実施される過程のミクロな末端を見ようとしているわけではないことに注意したい²²⁾。むしろリップスキーは、そうした相互行為場面において、ある種の政治のリアリティが

22) このような視点を採用する際、リップスキーはエスノメソドロジー研究を念頭においているわけではないのだが、E・ゴフマンの相互行為論をしばしば参照している。ゴフマンとエスノメソドロジーとの関係については、たとえば Rawls(1987)を参照のこと。

つくられていることを強調しているのである²³⁾。そしてそのリアリティを構成する実践は、政治権力の作動を促す構造と結びついている。このことを、説明していこう。

多少原則的なところから話をはじめると、政治が機能していることは、集散的に拘束的な決定の作成とその実施が確保されていることを一般的な条件としている。人びとは（たとえそれが自分の信念と異なっていた場合であっても）政治の決定を受け入れなければならないし、また政治はみずからの決定を強制しなければならない。政治の安定的な機能は、集散的に拘束的な決定の受容——つまり、政治権力への服従——を蓋然的なものにするような構造のもとではじめて可能である。

だが、現代の社会生活を考えてみると、われわれは政治との接触をほとんど意識的に経験していないし、政治の決定に従うか否かという自覚的な選択を迫られているわけでもない。しかしそのことから、われわれは政治と出会っていないのだ、と結論することはできない。リップスキーが述べるように、「たいていの市民が政府と出会うのは——もし出会うことがあるとすればだが——議員に手紙を書いたり、学校の理事会に出席したりすることによってではなく、自分の教師や自分の子供の教師を通じてであり、また街角やパトカーのなかにいる警官を通じてである。こうした出会いのそれぞれが、政策が供給されていることの事例なのである」（Lipsky 1980: 3=1986: 17）。要するに、人びとと政治との接触は、日常の具体的な場面における相互行為というかたちをとってあらわれ、そのような場面においてこそ、人びとの生きる政治の世界が現われるということである。そして、その相互行為の状況は、ある種の規範に従うように人を動機づける構造のもとで進行する。人びとは、ストリート・レベルの官僚との相互行為のなかで、その公共サービスを受ける自分に何が期待されているかを予期し、振る舞いをその場に「適切な (suitable)」ものに変えなければならない (Lipsky 1980: 11=1986: 27)。こうした相互行為のプロセスにおいて、多様な人生経験をもち、それぞれにユニークであるはずの個人は「市民」「サー

23) リップスキーのこうした考えは、福祉国家制度に対する人びとの信頼とソーシャル・キャピタルとの関係を論じる際に、第一線公務員と福祉受給者との関係を重視するB・ロスステインにも影響をあたえている (cf. Rothstein 2005)。

ヴィス受給者」「生徒」「患者」「求職者」等々になるのである²⁴⁾。

リップスキーは、そうした相互行為の場面における規範構造のなかに、政治権力への服従の契機を見つけることができると考えた。ただしそれは、ストリート・レベルの官僚による直接的な命令というかたちをとるだけではない（というより、そうしたかたちをとることは稀なケースである）。

「服従 (compliance) はその場の環境から結果することもある。その場の環境は、対象者に行動期待に関する手がかりを理解可能なかたちであたえている。図書館では小声で話すこと、被告は裁判官にたいして敬語で話すこと、患者は医者を静かに待つこと、子供は教師に従うこと…これらは、報復が差し迫っていることから直接的にそうになっているのではなくて、人びとがどういった行動をとることが“適切”であるかということ漠然と理解し、そうした規範からの逸脱が処罰の対象となるであろうことを漠然と理解しているからなのである」(Lipsky 1980: 57-58=1986: 90)。

人びととストリート・レベルの官僚との相互行為においては、権力関係における上下がシグナルによって発せられ、その場の適切性という規範が参照された振る舞いが接続することによって、政治権力の作動が可能になるのである。「市民」「サービス受給者」「生徒」「患者」「求職者」そして「公務員」として、人びとがその場において適切な規範に従うことは、政治権力が一般化されたかたちで作動するための構造となっている²⁵⁾。そして、こうした構造が再生産されるプロセスは、市民が政治に出会う具体的な場面において、そのような具体的な場面として、見つけることができるのである。

これまで、全体社会レベルでの権力循環はあまりにも“マクロ”で抽象

24) こうした論点を哲学的に掘り下げたものとしては、I・ハッキングの「人びとをつくり上げる」という論文が参考になる (Hacking 1986=2000)。

25) 多少説明しておく、権力は、個々人の選択の連鎖の偶発性を規制し、誰かの選択を自分の選択の前提として受容する場合にはたらくと考えられる。その意味で、一般化された権力は、多くの人びとにあたかもそれのみからの自由な選択であるかのように受容される構造のもとではじめて可能である。この点については、N・ルーマンによるつぎのような記述も参照のこと。「貨幣と似ているような権力、つまり、他の人びとの意思決定前提となり得るような意思決定前提を確立することを通じて、最大限の多様性をもつことができる権力が、最高度に一般化された権力である」(Luhmann 1975: 68=1986: 103)。

的な現象であるために、経験的な政治学の研究テーマには馴染まないと考えられてきた。しかし、どれほど“マクロ”とされる現象であっても、その現象がリアリティとして立ち現われるのは、具体的な文脈をともなったローカルな場面においてである。エスノメソドロロジーの方針を受容するならば、政治権力の作動に関する構造分析も、こうしたローカルな場面を対象として十分経験的に行うことができる²⁶⁾。第一線公務員論は行政と市民とのインターフェースの研究であるが、以上のように、その射程は政治構造論にまで及ぶものとなり得る。

(2) シリアのエスノグラフィー研究

さらにもうひとつ、人びとの日常的な実践から政治権力の作動構造を論じた事例研究としては、L・ウェディーン『支配の曖昧さ』(Wedeen 1999)を挙げることもできる。ウェディーンは1971年から2000年まで続いたシリアのハーフィズ・アル＝アサド政権を題材に、政権の権力が何を基盤として作用するのかということ、人びとが普段接触するシンボルやレトリックに注目しながら分析している。分析のアプローチは政治的エスノグラフィーであり、ウェディーンはそれを実証主義的な政治学のオルタナティブとして自覚的に選択している (cf. Wedeen 2010)。エスノグラフィーはエスノメソドロロジーとさしあたり関係しないのだが²⁷⁾、シリアに関するウェディーンの研究については、結果的にエスノメソドロロジーと重なるような見方がなされている。

ウェディーンは、権威主義体制下のアサド政権を、一種の「カルト」と

26) 同様の問題関心は、畠山(1989)にも見られる。畠山は第一線公務員と市民との直接的相互作用の場面を「パブリック・エンカウンター」と名付け、ゴフマンやエスノメソドロロジーの知見も援用した権力論の見通しを論じている。

27) 語感が似ているために、しばしばエスノメソドロロジーとエスノグラフィーは混同されるが、両者は区別されなければならない。すでに述べたように、エスノメソドロロジーは、ある出来事を具体的な文脈のなかで理解可能なものとして秩序立てて構成する実践を記述する。よってエスノメソドロロジーはあくまでも研究の方針であって、決まった方法論があるわけではない。それに対して、エスノグラフィーは文化人類学的な参与観察を基本的な方法とし、対象者がいる行為や事象にどのような主観的な意味を付与しているかを記述するものである (cf. Schatz 2009)。ただしもちろん、エスノグラフィーによってエスノメソドロロジー研究をおこなうことも可能である。

して表現した。というのも、街中にはアサドを讃えるポスターが溢れ、国民の祝日にはアサドをかたどったマスケゲームがスタジアムで催され、あらゆるメディアはアサドを「父」「戦士」「英雄」「全能の人」と喧伝し、そしてどのシリア人も体制の公式的な語彙に通じているからである。まるでシリア全体がひとつのカルト教団であるかのように、人びとはアサド大統領に心酔しきっているように見える。だが実際には、シリアの人びとはほとんど誰もアサドをめぐるこうしたシンボルやレトリックを信じてはいない。そこでウェディーンはつぎのような問いを立てた。もし誰もが——体制側の人間も含めて——カルトの見世物を見え透いていて馬鹿げたものだと考えているのなら、なぜそのようなカルトが存続しているのだろうか。そして、そもそもなぜアサド政権が長期間にわたって支配を行うことができたのだろうか。

通常、全体社会における政治権力の受容に関しては、正統性と物理的な強制力という二つの面から説明されてきた (Wedeen 1999: 5-12, 144-145)。つまり、支配が可能であるのは、被治者がその政治権力を正統なものとして信じている場合か、さもなくば物理的な強制力によって被治者を事実上服従させることができる場合である、ということである。しかし、たとえば政治風刺がシリア社会に一般に広く流布していることから分かるように、アサドのカルトがまやかしであることは誰でも理解しているし²⁸⁾、またそのような説明では、なぜ馬鹿げて見え透いた見世物が繰り返し広げられているのかを十分に示せない。

ウェディーンは、その代わりに、アサドのカルトが信じられていないところにこそ、体制の権力基盤があるのだと主張する。そして、政府の高官から一般の市民にいたるまで、すべての人びとが信じていないにも関わらず信じているかのように (as if) 振舞わざるを得ない——そしてそのことを誰もが知っている——ことが、体制への服従を引き出しているのだと考えた。つまり、自分も他人もアサドを信じているかのように振る舞わざるを得ないような具体的な場面において、政治権力の作動構造が再生産されるわけである。

28) 権威主義体制のシリアで政治風刺が検閲を免れているのは、まさに検閲官がその風刺を理解できていることを公言できないからだと言えウェディーンは言う。もし政治風刺が「風刺」に、つまり一種のアイロニーになっていることを理解しているならば、検閲官はカルトの公式教義を心から信じていないことを告白することになってしまう (Wedeen 1999: 108)。

「人びとがカルトの言い分を一様に信じているわけでもなく、また、研究者がファシスト体制に見出したような一種の持続的な心服を引き出すカリスマ的で革命的な見通しをアサドが示しているわけでもないにもかかわらず、見世物（たとえそれが“失敗している”ものであっても）は政治的なアイデアや信念を体制の象徴的表現（iconography）に基礎づけることによって、公的空間を埋め尽くしてしまう。見世物は、体制への服従に向けてと同様に、これから見ていくように、体制への挑戦に向けてイメージや語彙を構造化する。アサドのカルトは、たとえそれが信じられていないとしても、それゆえにこそ曖昧であっても強力な社会的コントロールのメカニズムなのである」（Wedeen 1999: 24）。

ウェディーンは、政治的エスノグラフィーによって、シリアの人びとの日常的な実践（街角での会話、車に貼りつけられたアサドを讚えるステッカー、テレビ放送など）が、いかに体制の公式教義の語彙を強化し、政治権力の作動を確保するかを記述している。彼女はこのような権力のあり方を『『規律的 - シンボリック』権力』と名づけ、それをカルトの公式教義を市民の日常生活に浸透させることで、あらゆる人びとの公的な実践が自ずと服従の構成要素となるように作用する権力だと説明している（Wedeen 1999: 145）。

このようなエスノグラフィー研究は、シンボルやレトリックに注目する点で政治文化論やメディア論とも親近性があるのだが、それをあくまでも経験的な政治構造論として展開している点に特徴がある。シンボルやレトリックを、体制側のアクターが戦略的な見通しをもって広めている、という主体論的で因果論的な解釈を施す必要はまったくない（そのようにすることも可能だが、それはたとえば「誰のどのような利益にもとづいた行為なのか」という問いかけを呼び寄せるだろう。それに対する回答は、実際に人びとが生きている政治的世界の等閑視の上にはしか成り立たない²⁹⁾。そ

29) けれどもウェディーン自身は、政治的エスノグラフィーを解釈主義として位置づけつつ、それを実証主義とも協働可能なひとつの立場として考えている。「私の主張は、解釈学的な社会科学は一般化や因果的な説明をあきらめる必要はなく、エスノグラフィーの方法はそうした一般化や因果的な説明を確立するための役に立てることができる、というものである」（Wedeen 2010: 257）。筆者自身はこうした認識論上の折衷的な立場には反対であるが、この点については別の機会に論じることにしたい。

これはローカルな場面のなかに、その場面の理解可能性がすでに含まれているからであり、政治学者の解釈に先立って、社会の成員たちはそのような理解可能性を実践のなかで提示し合っているからである。よって、日常的な実践のなかで、どのような政治的リアリティがどのように形成されているのかということを書き記述することで、社会の“マクロ”な政治権力の作動構造もあきらかにできるはずである。エスノメソドロロジーは、このような可能性を開示してくれる。

4. 本稿のまとめと含意

エスノメソドロロジーは、人びとがあたりまえにやっていることを、それ自体の価値において社会科学の研究対象とするという考え方である。本稿では、政治学にとっては馴染みのないエスノメソドロロジーが、実証主義とは異なったかたちで経験的な政治学に寄与し得るということを書き、政治構造論を例にして論じてきた。最後に、エスノメソドロロジーの立場を最近の実証的な政治科学の傾向と対比して、それがあらたな可能性をもつことを主張しておきたい。

実証的な政治科学において、人びとが日常的にどのような政治の世界を生きているかという観点は、A. 人びとが政治をどのように認識しているかをアンケート等によってたずねるか、B. 人びとの認知様式を脳科学等との学際的な連携によって実験的に示す、という方向のいずれかに行き着きやすい。Aの立場は、ある人の生きる政治の世界をあきらかにしようとすると、「心の内側は外からは見えないが本人にとって明白」であるため、本人に直接聞くのが最善の手段だとされる。Bの立場は、人間の行動もある程度なんらかの因果的メカニズムによって実証的に説明できるはずであり、そうである以上、人間行動を規定するミクロな原因を探求すべきであると想定している。だが、両者はともに、われわれにとっての政治の世界が“意味”的なものであるということを書き無視している。われわれが心的なものを帰属できるのは、具体的な文脈を伴った実践においてのみであり、心的なものだけを取り出そうとしまえば、われわれにとって“意味”

的なものを理解可能にしていた地平を奪い取ってしまうことになる³⁰⁾。また、たしかにわれわれの意識や認知といったものは、ニューロン等のはたらきから因果的に説明できるのかもしれない。だが、J・サールが述べるように、だからと言って意識や認知とはニューロンのふるまいに過ぎないのだということにはならない³¹⁾。なぜなら、自分自身のことを考えてみても、われわれは意識や認知が主観的なものであることを知っているからだ。

政治学が記述・分析しようとしているものは、あくまでも政治現象である。政治現象は石や木の枝のように視覚的に観察できるものではなく、それがリアルであり、人びとが実際に政治の世界を生きているために観察できるものである。エスノメソドロジーの提案は、そうしたリアリティが作られているローカルな実践の場面に立ち返ることを求める。政治現象をつくっていく実践は、徹底的に個別の文脈に依存したものであり、当該の状況と再帰的な関係にある。そうである以上、われわれの政治の理解可能性は、そうした文脈（常識、日常的にわれわれが使用する概念、「通俗的な推論」等々）によってあたえられているのである。心的なものであれ、脳のはたらきであれ、また行為の合理性の仮定であれ、社会的世界を（それ自体では社会的でない）「原因」に対する「結果」として見てしまうならば、この文脈をうまく捉えることができなくなってしまう。エスノメソドロジーは、こうした文脈に即して経験的な記述・分析をおこなうものであり、そのことは、人びとの政治実践によってリアリティとして構成される政治現象を研究対象とする政治学にとっても、当然に意義をもつ。今後必要なのは、こうした意義を具体的な経験分析として示すような研究がなされていくことである。

【謝辞】

本論文は、2015年10月11日に千葉大学において開催された日本政治学会（E-7「市民と政治」セッション）における報告ペーパーを一部修正

30) たとえばJ・クルターも言うように、行為の記述にさいして、いかなる態度決定をすることもなく成員たちがしていることを記述することができないのは、社会的世界の成員であることを超越しながら、行為をそれと分かるようなしかなかたで記述することが、そもそも不可能だからにほかならない（cf. Coulter 1979: 13=1998: 28）。

31) サールは、こうした自身の立場を「生物学的自然主義（biological naturalism）」と呼んでいる（Searle 2004: 113=2006: 153）。

したものです。報告に対してコメントをくださった方々および、とりわけ司会を務めてくださった荒井紀一郎先生（首都大学東京）、コメンテーターを務めてくださった境家史郎先生（首都大学東京）・乙部延剛先生（茨城大学）に御礼を申し上げます。

参考文献一覧

※引用に際しては、邦訳のあるものは基本的にそれを参照したが、訳文を修正している場合がある。

- 小宮友根（2011）『実践の中のジェンダー——法システムの社会学的記述』新曜社。
- 串田秀也・好井裕明編（2010）『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社。
- サククス・ハーヴィ、シェグロフ・エマニュエル・A、ジェファソン・ゲール（2010）西阪仰訳『会話分析基本論集——順番交代と修復の組織』世界思想社。
- 西阪仰（1997）「会話分析になにができるか——『社会秩序の問題』をめぐって」奥村隆編『社会学になにができるか』八千代出版。
- 西山真司（2010-2011）「政治文化論の問題構成と理論的基礎の再検討——政治理論としての信頼論に向けて（一）（二）（三・完）」『法政論集』第236～238号。
- 畠山弘文（1989）『官僚制支配の日常構造——善意による支配とは何か』三一書房。
- 浜日出夫（1992）「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」好井裕明編『エスノメソドロジーの現実——せめぎあう〈生〉と〈常〉』世界思想社。
- 山田真裕（2016）『政治参加と民主政治』東京大学出版会。
- Almond, Gabriel A. and Verba, Sidney (1963) *The Civic Culture; Political Attitudes and Democracy in Five Nations*, Princeton University Press. [石川一雄ほか訳『現代市民の政治文化』勁草書房、1974年]
- Bar-Hillel, Yehoshua (1954) "Indexical Expressions", *Mind*, Vol.63, No.251, pp.359-379.
- Coser, Lewis A. (1975) "Presidential Address: Two Methods in Search of a Substance", *American Sociologist Review*, Vol.40, No.6, pp.691-700.
- Coulter, Jeff (1979) *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, The Macmillan Press. [西阪仰訳『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点（抄訳）』新曜社、1998年]
- Easton, David (1993) "Political Science in the United States: Past and Present", in Farr, James and Seideman, Raymond (eds.) *Discipline and History*, The University of Michigan Press.

[本田弘・藤原孝ほか訳『アメリカ政治学の展開——学説と歴史』サンワコーポレーション、1996年]

Garfinkel, Harold (1952) *The Perception of the Other: A Study in Social Order*, Ph.D Dissertation, Harvard University (unpublished paper) .

——(1963) “A Conception of, and Experiments with, “Trust” as a Condition of Stable Concerted Actions”, in Harvey, O. J. (ed.) *Motivation and Social Interaction: Cognitive Deteminants*, The Ronald Press Company.

——(1964) “Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities”, *Social Problems*, Vol.11, No.3, pp.225-250. [北澤裕・西阪仰訳「日常活動の基盤——当り前を見る」『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社、1995年]

——(1967) *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.

——(1991) “Respecification: Evidence for Locally Produced, Naturally Accountable Phenomena of Order, Logic, Reason, Meaning Method, etc. in and as of the Essential Haeccity of Immortal Ordinary Society, (I) ——an Announcement of Studies”, in Button, Graham (ed.) *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press.

——(1996) “Ethnomethodology’s Program”, *Social Psychology Quarterly*, Vol.59, No.1, pp.5-21.

Garfinkel, Harold and Sacks, Harvey (1970) “On Formal Structure of Practical Actions”, in McKinney, John C. and Tiryakian, Edward A. (eds.) *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, Meredith Corporation.

Giddens, Anthony (1977) *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson of London. [宮島喬ほか訳『社会理論の現代像——デュルケム、ウェーバー、解釈学、エスノメソドロロジー（抄訳）』みすず書房、1986年]

Habermas, Jürgen (1981) *Theorie des Kommunikativen Handelns, Bd.1・2, Suhrkamp*. [河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論（上・中・下）』未来社、1985 - 1987年]

Hacking, Ian (1986) “Making up People”, in Heller, Thomas C., Sosna, Morton and Wellbery, David E. (eds.) *Reconstructing Individualism: Anatomy, Individuality, and the Self in Western Thought*, Stanford University Press. [隠岐さや香訳「人々を作り上げる」『現代思想』第二八巻一号、青土社、2000年]

Heritage, John (1984) *Garfinkel and Ethnomethodology*, Polity Press.

Hilbert, Richard A. (1990) “Ethnomethodology and the Micro-Macro Order”, *American Sociological Review*, Vol.55, No.6, pp.794-808.

Kim, Young C. (1964) “The Concept of Political Culture in Comparative Politics”, *The Journal of*

- Politics*, Vol.26, No.2, pp.313-336.
- Koschmann, Timothy(2012)“Early Glimmers of the Now Familiar Ethnomethodological Themes in Garfinkel’s “The Perception of the Other””, *Human Studies*, Vol.35, pp.479-504.
- LeBlanc, Robin M.(1999)*Bicycle Citizens: The Political World of the Japanese Housewife*, University of California Press. [尾内隆之訳『バイシクル・シティズン——「政治」を拒否する日本の主婦』勁草書房、2012年]
- Lehman, Edward W.(1972)“On the Concept of Political Culture: A Theoretical Reassessment”, *Social Forces*, Vol.50, No.3, pp.361-370.
- Lipsky, Michael(1980)*Street-level Bureaucracy: Dilemmas of the Individual in Public Services*, Russell Sage Foundation. [田尾雅夫・北大路信郷訳『行政サービスのディレンマ——ストリート・レベルの官僚制』木鐸社、1986年]
- Luhmann, Niklas(1975)*Macht*, Ferdinand Enke Verlag. [長岡克行訳『権力』勁草書房、1986年]
- Lynch, Michael(1993)*Scientific Practice and Ordinary Action; Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press. [水川喜文・中村和生監訳『エスノメソドロロジーと科学実践の社会学』勁草書房、2012年]
- (1999)“Silence in Context: Ethnomethodology and Social Theory”, *Human Studies*, No.22, pp.211-233.
- (2000)“Against Reflexivity as an Academic Virtue and Source of Privileged Knowledge”, *Theory, Culture & Society*, Vol.17, No.3, pp.26-54.
- (2001)“Ethnomethodology and the Logic of Practice”, in Schatzki, Theodore R., Cetina, Karin Knorr and von Savigny, Eike(eds.)*The Practice Turn in Contemporary Theory*, Routledge. [椎野信雄訳「エスノメソドロロジーと実践の論理」『情況：別冊 実践 - 空間の社会学：他者・時間・関係の基層から』八月号、2000年]
- Parsons, Talcott(1937[1968])*The Structure of Social Action, vol.1-2*, The Free Press. [稲上毅・厚東洋輔ほか訳『社会的行為の構造（第一～五分冊）』木鐸社、1974～1989年]
- Pateman, Carol(1971)“Political Culture, Political Structure and Political Change”, *British Journal of Political Science*, Vol.1, No.3, pp.291-305.
- Pollner, Melvin(1978)“Constitutive and Mundane Versions of Labeling Theory”, *Human Studies*, Vol.1, No.3, pp.269-288.
- (1987)*Mundane Reason; Reality in Everyday and Sociological Discourse*, Cambridge University Press.

- (1991)“Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity”, *American Sociological Review*, Vol.56, No.3, pp.370-380.
- Pye, Lucian(1973)“Culture and Political Science: Problems in the Evaluation of the Concept of Political Culture”, in Schneider, Louis and Bonjean, Charles M.(eds.)*The Idea of Culture in the Social Sciences*, Cambridge University Press.
- Rawls, Anne W.(1987)“The Interaction Order Sui Generis: Goffman’s Contribution to Social Theory”, *Sociological Theory*, Vol.5, No.2, pp.136-149.
- Rothstein, Bo(2005)*Social Traps and the Problem of Trust*, Cambridge University Press.
- Schatz, Edward(2009)“Ethnographic Immersion and the Study of Politics”, in Schatz, Edward (ed.)*Political Ethnography: What Immersion Contributes to the Study of Power*, The University of Chicago Press.
- Searle, John R.(2004)*Mind: A Brief Introduction*, Oxford University Press. [山本貴光・吉川浩満訳『MiND マインド心の哲学』朝日出版社、2006年]
- Stoker, Gerry(2010)“The Rise of Political Disenchantment”, in Hay, Colin(ed.)*New Directions in Political Science*, Palgrave Macmillan.
- Wedeen, Lisa(1999)*Ambiguities of Domination; Politics, Rhetoric, and Symbols in Contemporary Syria*, University of Chicago Press.
- (2010)“Reflections on Ethnographic Work in Political Science”, *Annual Review of Political Science*, Vol.13, pp.255-272.

